

研修事後レポート

4年 20A044 小谷ゆら

最初にこの度研修費用を補助して下さった薬学会様に感謝いたします。本レポートでは研修より体験した韓国の薬学事情や大学生活、文化などについて述べます。

まず、病院研修についてです。この度見学させていただいた漢陽大学病院はソウル市特別区にあり、1400人ほどの医療従事者とともに国内問わず国外からの患者に対応していました。国外というと近隣の中国等ではなくロシアやモンゴルからの患者が多くを占めているようで、外国人患者の為に英語だけでなくモンゴル語、ロシア語の通訳者が在中している国際的な医療機関でもありました。主にリウマチ系疾患や筋萎縮性側索硬化症に対応しており国内のリウマチ患者が多く来院するようでこれらの疾患に関しては国際協力病院として機能しているそうです。韓国の病院での薬剤師業務は日本と大きな差はなく、病棟においては抗がん剤やTPA、麻薬等の調整を行い、外来では調剤業務や服薬指導等に従事していました。無菌室では音楽が流れていたのが楽しく働ける環境に配慮されていると感じました。

次に薬局についてです。こちらは日本とは大きく違う点がいくつもありました。韓国の薬局にはチェーン店が存在せず基本的に薬剤師やその他薬局従事者は経營業務もこなす必要があること、一度に処方される薬が主に半年～8か月ほどであること、処方規模が少なくOTC薬の種類が多い日本とは正反対で規模が大きくOTCが少ないこと、一包化をする事が基本であること、給料が自分である程度希望することができる事が特徴でした。日本と同様な点としては

基本的に処方箋より薬をピックアップし服薬指導する流れ、服薬指導の際にコミュニケーションを大事にしていることが挙げられます。病院や薬局でも薬剤師自身が働きやすく、また給料を希望できる等で業務により真剣に取り組むきっかけがあることが日本と違う点であり、韓国では働くものを大切にしているのだと感じました。

最後に韓国薬学生の実習についてです。日本では4年時のCBT、OSCEに合格することで主に5年時より病院や薬局での実習を開始しますが、韓国では実習は6年時に行うそうです。すべての実習を終えた後病院や薬局、製薬企業等の自分が希望する実習先に発展的なことを学びにさらに実習を行うのが特徴でした。日常生活ではこちらと大差なく放課後に部活動をしたりアルバイトを行ったり、友人と遊びに行ったりします。

ここからは韓国の文化について記載します。まず食事ですが辛いものが主流のようですが冷麺やうどんのような辛い料理が多くあったように感じました。明洞は日本人観光客が多く、店員さん日本語を話せる人がほとんどでした。相反して英語を話せる人は少ないように感じました。気軽に行けるからこそ日本人が観光しやすい場所だと思います。日本同様バスや地下鉄等で使えるキャラクターがデザインされたICカードもあり便利でした。

本当に楽しい研修を迎えることができました。薬剤師の働き方、薬局経営の仕方、薬学生の実習制度の違いは興味深く視野を広げられました。このような機会に参加できたことを改めて感謝いたします。